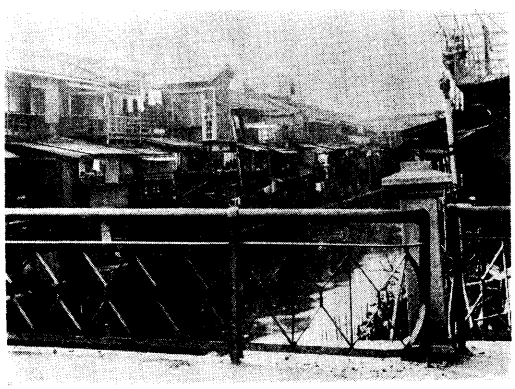
植村文樂軒大阪へ來る

文樂座の始り、因講創立事情

義太夫……二代目義太夫……近松門左衛門……によつて義太夫節が確立した。竹田出雲……吉田文三郎……によつて人形舞臺が大成した。この連續八十三年間の功績になる『操り芝居』も、すぐそのあとにつゞく傑物が出なかつた爲めに、天明……寛政……享和の頃になると、もう殆んど四分五裂で、竹本座や豊竹座の殘黨その他の末流が、隨時隨所で其日ぐらしの興行を續けてゐるといふ狀態である。

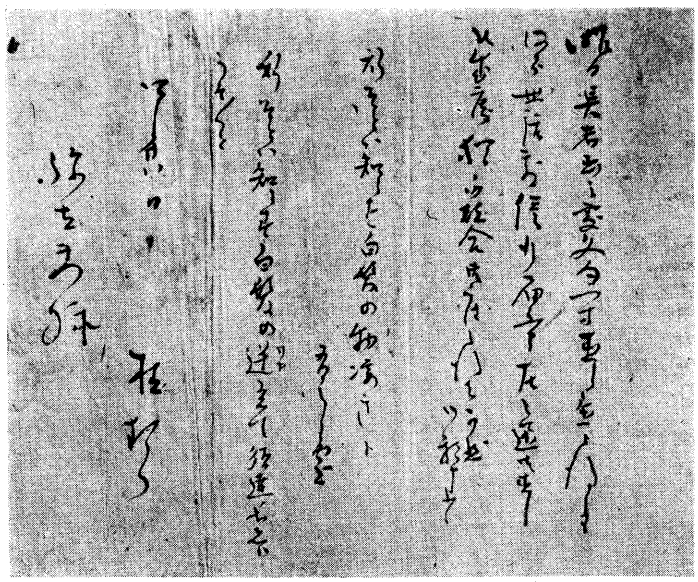
かう云ふとまるで操り芝居が亡びてしまつたやうに聞こえるが、それは藝術の上から云つた話で先人以上に新機軸を出して、斯道を盛り上げるといふやうな經過が見られないだけのことで、先人が成就してくれた『操り芝居』をそのまゝ守つてゐる狀態を指して云つてゐるのである。なんと云つても鄕土的香氣の高い固有藝術だ、一時の衰頽は見せてゐるとはいふものゝ、それでもその當時、道頓堀には西の芝居、竹田の芝居、若太夫の芝居。北の新地の芝居、北堀江には市の側の芝居、また寛政の中頃から平野町御靈社内の芝居。とかういふ風に『操り芝居』はかゝつてゐて決して尠ない數ではない。そればかりか豊竹派の系統を享けてゐる市の側の芝居は比較的基礎が確實で、こゝだけは、其日ぐらしではなかつたらしい。

かういふ際に、淡路の假屋から、文樂座の元祖植村文樂軒が大阪へ現はれて來た。これが最初根據を据えた芝居は何處であつたかといふと、南區高津の入堀に架する高津橋（高津四番丁）の南詰西の濱側である。頃は明和とも天明とも云ふが確かでない。本姓は柾木氏、文樂軒は素人淨瑠璃での雅號である。だから最初の間は文樂軒の芝居と稱へてゐる。文樂座と稱へ出したのはズツと後明治四年九月からのことである。（だが便宜上文樂座と云つて置くことにする）。そこで此高津橋で興行した元祖文樂軒の芝居は、どういふ狀態



高津橋西植村文樂座發祥の地

で經營を續けられたか、またいつ頃まで打つてゐたのか殘念ながらそれ等は何等の記錄も無いので解らないが、文化九年一月からは博勞町稻荷社内の芝居に移つて連續興行をしてゐる。それがやがて天保十三年五月の社寺内芝居の禁止といふ改革令が出るまで動いてはゐない。此期間に元祖文樂軒は死し、同じ淡路の人で大藏といふのが養子となり、二世と成りて、號を樂翁と呼んだところから後に文樂翁と稱された。これが久しく沈滯してゐた『操り芝居』を奮ひ立たしめた功勞者で、即ち斯道中興の恩人。單に人形淨瑠璃經營の才ばかりではなく、文才にも富んでゐたのだから、無論藝術的にも理解を有つてゐた。新作物を多く上演し自身でも改作などをしてゐる（新作の事は後に說く）。第三世は文樂翁の實子大助といふ人で、これは骨董物が好きで、暢春堂と號して後には支那貿易などをやつて大損失を被つたといふことである。明治二十一年に第三世大助は死し、二十三年に二世文樂翁も逝き、そのあとの第四世文樂座々主は大助の實子泰藏が相續をしたが、遂に四十二年三月。松竹合名會社（當時は會社、後に合名社と改む）が買收して引續き現今その經營を續けてゐる



二世植村文樂翁筆蹟

さて話は元に戻る。第一世文樂軒が淡路から大阪の高津橋に出て來た頃から天保十三年の大改革令の出た騷動までは、群小興行家の簇立した平凡時代であつたが、此間に淨瑠璃界にとつて、二つの記憶すべき出來ごとがある。その一つは寬政九年の、淨瑠璃三業因講の組織と。もう一つは天保八年の說教讀語座の事件とである。

因講といふのは大阪義太夫節同業者の殆んど全部を網羅した一の結社である。（現今も無論存續してゐる）この因講社なるものが明瞭に記錄に現はれ出したのが今を去る百三十餘年の昔（寬政九年三月）のことである。かういふ形式の結社はそも〳〵これが始めかといふと、もう一つ昔にもそれに似た例がある。（私が襲藏する竹本筑後掾の連盟狀）を見ると寶永の頃に筑後掾が『二十日會』といふのを開いて門人を集め、師弟の情誼を温めると共に、專ら藝道についての口傳教訓を施したといふ事實がある。それは

毎年正月……五月……九月の二十日に三回名の如く『二十日會』を催して來たが筑後掾歿後、門人中にも自然各地に離散したり、いろ〳〵の事故があつて、會合をすることが出來なくなつた、で二十日會も有名無實に終らうとしてゐる。これを嘆いて享保六年五月、竹田出雲が八方へ檄を飛ばして、勸誘をしてゐる。その回文の一節を記して見る。

筑後存生より定め置かれ候、正五九月二十會の儀、同門弟衆の内、近年心々にて成就致し難く候。左樣にては此會退轉に及び道喜（筑後の事）存立の本意も立ち難く且つは一流の末にも成り候事殘念至極の儀に候……。

かういふ按配で熱心に勸說してゐるが、サテその結果どうなつてゐるか知るよしもないが、爾來何等かの方法で、かうした會合結社は續けられてゐたものと思はれる。

これと因講とは形式も精神もだいぶ違ふが、自派を向上せしめ保護せしめやうといふ點に於ては同じである。以下寛政九年創立の因講結社に就て當時の事情を少々述べる。

竹田出雲二十日會廻文

此當時の淨瑠璃界には素人の所謂天狗連が多く、中にまた相當の技倆を持つてゐるものもあつて、これが無暗と太夫を勝手につけて諸方へ出演した。當業者から見ると永い間師匠について苦勞をしてやつと許された太夫名をさう亂暴に使用されては堪らぬわけ、で見つけ次第に其不埒を責め、撤回を申込んで見ても、なか〳〵應じない。と云つて打つちやつて於ては本業の太夫の渡世の妨げになる、いろ〳〵手を代へ品を代へて、かういふ僞せ物の撲滅に全力を注いだが、どうしても、横着者の跡を絶たないのだ。で當時の年行司をしてゐた豐竹時太夫（三代目）竹本重太夫（二代目）後に四代目染太夫、を始め竹本町太夫、文字太夫等が連署して、その筋の御厄介になることになつて、町奉行所へと出訴に及んだ。すると當役の山口丹波守は早速これを受理して、萩野勘左衛門、工藤七郎右衛門、といふ役人達と協議をして、直ちに命を下して、不埒なる素人太夫どもの一掃を試みた。

これで先づ太夫連の目的は達し一と安心は出來たといふものだが、さて翻つて已れを考へて見ると、このやうに素人の横着者が天下に横行をするといふのも、所詮は當業者にそれ〴〵節制が欠げてゐる結果で、すべての風儀も次第に頽廢に傾いてゐる今日、或はかういふ出來ごとの起るのも當然かも知れない。此際當業者は大いに結束して、協同的の歩調を取り、外敵に當ると同時に、内には大いに親交を溫めて、斯道の興隆を謀らねばならない。これはよろしく當業者一致の機關を設けて、同盟結合の實を擧げるにしくはない。かういふ處へ氣がついてサテ此處に因講なるものが出來たわけである。そこで此組合は直ちに大阪在住の太夫三味線衆に依つて組織されその重なる人々が協議の上、左のやうな申合せ規約が出來た。

一、淨瑠璃並に三味線心掛けの人々因講へ入講これあるべく候。然る上は地他芝居の儀は申すに及ばず、假令稽古淨瑠璃とも講外の太夫三味線一座致すまじく候。入れ込みに相拖へられ候はゞ最寄の年行司より篤と相糺し候上にて應對濟引致さす可く候　以上

かういふ團結が出來て、毎年十二月二十五日には、天照皇太神宮を奉祀して、御神酒を備へ、天下泰平五穀成就、併せて同業の者は親子兄弟の如く睦じく因みを結ぶといふ趣意で擧つて此日に集合した。當時の極め文に。

天照皇太神宮へ例年極月御神酒奉備候間當日は入講の衆中遲滯等無之樣右御神酒頂戴の爲め第一に御出席之れある可く候

とある。かうして組織的な同業者の機關は出來た。さうして一年中の問題を此處で凝議決定することになつてゐる。席順は年功者をもつて上席とする。資格からいふと、古老……中老……平人、といふことになつてゐる。その席は新町橋の西詰にあつた料亭新卯樓といふのがその會合の場所であつた。以上が因講の起源である。（現今の因講は略する）

慶應四年が明治元年一月と改まつた維新政變の眞つ唯中、伏見鳥羽の戰から、さう〳〵慶喜公大阪落ちといふ騷ぎ、遺が博勞町稻荷の文樂座もその月は『大阪落城に付休業』と貼り出したが、その翌二月には、もう直ぐ十二日初日で「金門五三桐」を出し、例の石川五右衞門が市中を見下ろして＝春宵一刻價千金テモ麗らかな眺めぢやナア＝